

第 42 話 (23 頁) カエルとネズミとオオタカ

カエルとネズミが口げんかをはじめました。
ものかげから外に出て、とっくみあいをはじめました。
おれのことを忘れているな、とオオタカが急降下して、2匹ともつかまえてしましました。

「実に短い。形容詞や副詞といった余分な表現が一切ない。センテンスも三つ。極限の簡潔なお話だ。」

「3センテンスで3段落。はじめました、はじめました、しましました。述語の末尾が同じで、リズム感たっぷりだよ。」

「これは翻訳の妙かな。原文では、韻を踏むとか特段の工夫はしていないから。」

「話の筋も実に分かりやすい。つまらないことで喧嘩してはいけない、周りのことだけじゃなく全体を見渡さないと災難を招きかねない、我を忘れて夢中になってはいけない…。木を見て森を見ず、という言葉もあるし。こういう類のお話や教訓は多い、よね。」

「オオタカが出てくるのは、アーズブカでは、ここだけみたいだ。意外だった。」

「オオタカ抜きの『ネズミとカエル』(14頁)は、すでに検討したけど、そのとき紹介したネットのイソップ寓話では、溺れ死んだネズミも、足をくくりつけていたカエルも、タカに食べられちゃう。このタカと、アーズブカのオオタカは、状況設定がそっくりだ。」

「オオタカの立場からみれば、まさに漁夫の利、だね。」

「弱小国同士が争っていたら、大国が全部、自分の領土にしてしまうとか。世界史や現代政治にも通じるかもしれない。」

「オオタカといえば、古くから、世界的にガンやカモ猟などの鷹狩に使われてきた。日本では鷹匠という職業もあったぐらいだ。」

「トルストイは狩猟が大好きだったんだよね。」

「世界大百科事典によれば、狩猟鳥獣を捕獲するからと英国ではオオタカが目の敵にされて激減した。そんなに西洋人は銃での狩猟が好きだった、ということか。」